

## 編集後記

当インスティテュートの機関誌『女性学評論』もその創刊号より歳月を重ね、量質ともに成長してきたことをあらためて思う。そして、第12号も新旧インスティテュート・メンバー寄稿の論文をえて「家族」特集号が組めたことを編集委員のひとりとして喜ぶたい。この機関誌を開かれた討論の場（フォーラム）としてさらに活用されることを願う。（K. B.）

「家族」という特集テーマにも一因があったと“自賛”しておりますが、第12号の充実ぶりに、本学のスタッフの層の厚さ、研究の多様性、そしてそこからわきおこる新しい風の勢いすら感じております。この風がさらに力を加えて次の13号へと吹き続けていってくれることを願いつつ、ご寄稿くださった方々、編集委員の方々、全幅の信頼が置ける有能な豊福助手に感謝しております。（A. F.）

編集委員とは名ばかりで、いつも他のみなさんの議論に相槌をうつだけでした。昇進差別やコース別管理のため、日本女性の生涯賃金は男性の6割にも達しません。平等という意識の広まりほどに実生活上の格差は縮まっていないのです。いずれそんな特集があれば……かげながら応援したい。ひそかにそう思っています。（Y. I.）

今回の『女性学評論』は家族をテーマとして取り上げました。女性にとって家族というのは大きな関わりを持っている、と言えると思います。今回投稿された論文を読ませていただいて、自分と家族との関係をあらためて考え直す機会を与えられました。娘としての自分、親としての自分、これまでの家族、これからの家族……いろいろな観点から家族のあり方、自分のあり方について考えることができました。（Y. M.）

お寄せいただいた多彩な原稿を読みながら、今まで自分が「女性学」をかなり狭い枠でしか捉えてこなかったのではないかと、反省させられました。学の固定観念を崩す柔軟な視点こそが求められるはずのこの分野、この論集にとっては、編集委員失格であったかも知れませんが……委員会でのこの二年、たいした仕事もせず学ばせていただく一方でした。（M. M.）

